

たそがれの物語

—セルマ・ラーゲルレーヴ『イエスタ・ベルリングのサガ』
における前近代的世界（前編）

中丸 禎子

I. 作者と作品

セルマ・ラーゲルレーヴ(Lagerlöf, Selma Ottilia Lovisa)は、1858年、スウェーデンの南西部、ヴェルムランド(Värmland)のモールバック(Mårbacka)に生まれた。ヴェルムランドはスウェーデンでは比較的豊かな地域で、代々続く領主が農園を経営し、副業として、製鉄や炭焼き、林業なども行っていた。文学の土壌も豊かで、スウェーデン随一の民間伝承の宝庫とうたわれ、エサイアス・テグネル(Tegnér, Esaias 1782-1846)、エリック・グスタフ・イエイエール(Geijer, Erik Gustaf 1783-1847)など、スウェーデンを代表する詩人も輩出している。ラーゲルレーヴ家は17世紀から続く大地主の家系で、二人の詩人も縁戚関係にあり、曾祖父の代までは牧師として、祖父と父は軍人として、地域の尊敬を集めていた。セルマ・ラーゲルレーヴはこの家の第四子として生まれ、左足が不自由だったこともあって、非常に大切に育てられた。彼女は幼少期の大部分を、祖母や乳母が語る聖者伝やヴェルムランドの伝承を聞いたり、父の書棚の本を読んだりして過ごし、8歳の時に作家になろうと決心すると、14、5歳の頃から詩を作り始めた。¹そのまま何事もなければ、ラーゲルレーヴはおそらく、詩を書き、農場経営をしながら、生涯、ヴェルムランドで裕福な暮らしを続けただろう。

ところが、19世紀も末になると、ヴェルムランドのような農村にも近代化の波が押し寄せ、名だたる旧家はラーゲルレーヴ家を含めてことごとく没落した。父のエリック・グスタフ・ラーゲルレーヴはさまざまな事業に手をつけては失敗し、多くの地所を失って、酒を飲むようになった。ラーゲルレーヴは家計を助けるために、1885年にスウェーデン南部のランスクローナ(Landskrona)で教職についたが、その直前に父は死に、1888年には彼女が生まれ育った屋敷が競売にかけられた。近代化とそれに伴う旧家の没落は、ラー

¹ ラーシェン、ハンナ・アストループ（萩原悠子訳）：『神秘と幻想の作家—セルマ・ラーゲルレーヴ』、1975、S.1-6。ラーゲルレーヴの伝記的事実については、基本的にこの本を参照し、必要に応じて、自伝『モールバック』およびブランデルの論文を参照した。

ゲルレーヴとヴェルムランドの人々の暮らしを変えた大事件だった。

しかし、こうした中で執筆された処女作『イエスタ・ベルリングのサガ』²は、近代化とそれに関する問題を正面きって取り上げたものではなかった。この作品は、彼女が子どもの頃に聞いた伝承と、実際に知っている人々をモデルに、舞台を1820年代に設定して書かれた、「古き良き」ヴェルムランドの物語である。作品の導入部で、主人公イエスタ・ベルリングは牧師を免職され、ヴェルムランド一の権力者「少佐夫人」の「騎士」³になる。その6年後のクリスマスから次の年のクリスマスまでを扱う本編では、イエスタの恋や少佐夫人との対立と和解、ヴェルムランドに住むさまざまなものたちの生と死が、「今日ほどには開かれていない」⁴原初的な風土を舞台に展開される。そこで人々が営むのは、近代資本主義が目指すのとは別の意味での豊かな暮らしである。森や湖には精霊が棲み、晩には炉辺で詩が朗読され、ヴァイオリンが奏でられる。誰もが一度は内にひそむ善意に従って他人のために自己を犠牲にし、人と人とは愛によって結ばれる。

ラーゲルレーヴは教師をしながらこの作品を執筆し、そのうちの五章分を女性雑誌〈イドウン〉⁵の懸賞に応募した。その結果、大賞を受賞し、一年の休暇を取ってこれを書き上げ、1891年、『イエスタ・ベルリングのサガ』と題して出版した。当時の北欧文学の主流は、ストリンドベルイ(Strindberg, August 1849-1912)やイブセン(Ibsen, Henrik 1828-1906)に代表される自然主義文学であり、あまりに作風の違うこの作品は、最初はあまり注目されなかったが、デンマークの自然主義文学者ブランドス(Brandes, Georg Morris Cohen, 1842-1927)に

²テキストは、Lagerlöf, Selma: Gösta Berlings saga. Femte tryckningen. AIT Trondheim (Albert Bonniers Förlag) 1994.を使用し、適宜、Lagerlöf, Selma: Gösta Berling. Roman. Übers. v. Pauline Kläiber-Gottschau. 12 Aufl. München (Deutschen Taschenbuch Verlag GmbH & Co. KG) 2001.を参照した。引用箇所の註では、スウェーデン語テキストのページの後に、括弧に入れて、ドイツ語訳のページを付した。なお、sagaに「サガ」という訳語をあてたことについては、II. 1. (2).「雑多な登場人物と「サガ」」の章を参照。

³ kavaljer (deu. Kavalier)。中世の騎士を表す riddare (deu. Ritter) ではない。彼らは、少佐夫人の守り手であり、芸術を愛し、女性に仕える「騎士道精神の持ち主」である。

⁴ Lagerlöf, Selma: Gösta Berlings saga. Femte tryckningen. AIT Trondheim (Albert Bonniers Förlag) 1994. S.28. (Gösta Berling. Roman. S.27.)

⁵ Idun, スウェーデンの週刊誌。1887年12月3日、ストックホルムでヨハン・フリテイヨフ・ヘルベルイ Johan Fritiof Hellberg が創刊。副題は、「女性と家庭のための実用週刊誌」。女性の自立と社会進出を目指す、上流階級の女性たちによって運営された。運営メンバーの一人アドレルスパーレ男爵夫人は、かねてからラーゲルレーヴの文才に注目しており、彼女が受賞した際に一年の休職を勧め、その間の経済援助を引き受けた。なお、イドウンは、北欧神話における青春の女神で、神々に不老不死を約束する金のリンゴをささげる。

高い評価を受ける⁶と、やがて北欧各国でベストセラーとなり、ヨーロッパ大陸にも輸出された。北歐文学史において、この作品は、自然主義から新ロマン主義への転換を示す作品の一つとされている。⁷

この作品において、ラーゲルレーヴは一見、近代化という「現実」から逃避し、前近代の農村の閉鎖性や差別性にも触れずに、「古き良き」時代を無批判に懐かしんでいるように見える。なぜなら彼女は、自ら体験した醜い「現実」、つまり、足が不自由で他の子どもたちと一緒に遊べず、またそのために結婚できなかったこと、あるいは、近代化が農村を侵蝕する過程で父を亡くし、家を失ったことを、直接的には書いていないからである。しかし、そのことを以って、この作品を単なる「現実逃避」や「美化」として片付けることはできるのだろうか。近代や前近代の抱える問題を正面きって取り上げ、世界を醜いものとして書くことだけが、現実と向き合うことなのだろうか。

醜い「現実」を知ってなお、世界を美しいものとして書くには、そうするための意志と主張が必要である。ラーゲルレーヴにとって、前近代を肯定的に書くということは、前近代を無批判に称賛することでも、近代の抱える問題から目をそらすことでもなく、近代とは違う価値を呈示すること、近代と対峙することだった。この論文では、『イエスタ・ベルリングのサガ』において、ラーゲルレーヴが前近代のヴェルムランドの何を書き、何を書かなかったのか、そうすることの中に、ラーゲルレーヴのどのような意志と主張が読み取れるのかを論じることで、作家が作品を書くということはどういうことであり、それは現実を生きていくこととどのように関わるのか、考えてみたい。

II. 前近代のヴェルムランド

1. 正反対のものの混交

(1) レーヴェン湖とイエスタ・ベルリング

『イエスタ・ベルリングのサガ』は、ヴェルムランドのレーヴェン湖⁸畔を舞

⁶ Brandes, Georg: Selma Lagerlöf. Gösta Berlings saga. (1893). In: Samlede Skrifter. Tredie Bind. Hovedstrømninger i det 19. Aarhundredes Literatur. Kjøbenhavn (Gyldendalske Boghandels Forlag) 1900.なお、この論文によって『イエスタ・ベルリングのサガ』が世に出たいきさつを、ラーゲルレーヴ自身が『開かれた扉』(『世界女流作家全集 7 北欧編』所収、西田正一訳、モダン日本社、1941)に書いている。

⁷ 百瀬宏、熊野聡、村井誠人編：北歐史(山川出版社)1998. S.304.

⁸ ヴェルムランド Värmland にはレーヴェン Löven という湖は実在しないが、『イエス

台に、そこに暮らす人々の、1820年代の始め⁹のある一年を書いたものである。この作品において何よりも目を引くのは、レーヴェン湖をはじめとする、自然描写の美しさである。

レーヴェン湖の東の岸に、美しい岬があります。岬の周りには、さざなみの立つ入り江が静かに水をたたえています。ボルイの地主の館がある、その大きな岬には、入らないようにして下さい。

レーヴェン湖が最も荘厳に見えるのは、岬の頂上から見た時です。

わたしの夢の湖がどんなに美しいかは、朝霧が滑らかな湖面を滑って行くさまをボルイの岬から見なければ分かりません。たくさんの記憶が住む、小さな青い部屋の窓から眺めていると、湖は、やがてとき色の日の入りを映し出します。¹⁰

しかし、ヴェルムランドの自然は美しいだけではない。滑らかな湖面は道行く人を死に誘い、レーヴェン湖に注ぐ川は雪どけ水で増水して堤防を押し流す。太陽は恵みをもたらしてもするが、旱魃を起こしもする。人間は森の木を切り出して使うが、その森には熊や狼がいる。あるいは、「ボルイの岬に入ってはならない」のは、岬の館で、数多くの悲恋があったからである。美しい「夢の湖」は常に危険を湛え、悲しみと苦悩を呼ぶ。ヴェルムランドが美しい世界だということは、そこに暮らす人間が、苦もなく安穏と生きているということではないのである。

森の闇の中には、呪われたけものたちが棲んでいます。彼らのあごには気味悪く光る牙や鋭いくちばしがあり、鋭い爪を持った足は、首を引き裂いて血を

タ・ベルリングのサガ』の巻頭に挙げられた地図によると、レーヴェン湖は、実在するフリーケン Fryken 湖と同じく、細長い葉の形をしている(lövは、葉の意)。ラーゲルレーヴの生まれたモールバックは、フリーケン湖畔にある。作品中のその他の地名も、「ヴェルムランド」やその州都「カールスタッド Karlstad」を除くとフィクションだが、これらも、レーヴェン湖をフリーケン湖に置き換えた場合の、実在の場所をモデルとしている。舞台の中心となるエケビュー Ekeby はロトナロース Rottnaros (次号掲載の第三章参照)に、市場や裁判所がある比較的大きな村ブロービュー Broby はスンネ Sunne に、騎士の一人リリエクローナの住居のあるレーヴダーラ Lövdala はモールバックに相当する。なお、リリエクローナという名の人物は、『リリエクローナの家 Liljecronas hem, 1911』『ポルチュガリエの皇帝 Kejsern av Portugallien, 1914』など他の作品にも登場し、特に、『リリエクローナの家』では、作者の祖父ダニエル・ラーゲルレーヴと同じ経歴を持っている。

⁹ vgl. Lagerlöf, Selma: Gösta Berlings saga. S.12. (Gösta Berling. Roman. S.12.)

¹⁰ Ebenda. S.176. (S.169.)

流そうとしてうずうずしています。目は生きものを殺そうとしてぎらついています。

そこには狼たちが棲んでいます。狼たちは夜になるとやって来て農夫の家族のそりを襲います。おかみさんは、自分と夫の命を救うために、ひざの上の小さな子どもをつかんで彼らの前に投げ出さなければなりません。¹¹

ラーゲルレーヴは、前近代を全く知らない近代人が、安易に今いる世界の対極としての「古き良き」昔にあこがれるように、自分のあざかり知らぬ「楽園」としての前近代にあこがれたのではなかった。ラーゲルレーヴが書く前近代のヴェルムランド、祖母たちから伝え聞き、子どもとして垣間見たヴェルムランドは、ノスタルジックで牧歌的な世界ではなく、貧しいが素朴で善良な人々が助け合って暮らす、のどかな世界でもなかった。それは、光の射さぬ森に人を喰う狼が棲まう世界であり、母が子のために我が身を投げ出すのではなく、自分が生き延びるために我が子を狼の前に投げ出す世界である。美しさにおいても危険においても人間を完全に圧倒する自然を前にして、ヴェルムランドの者たちは、全てをあるがままに受け入れ、それを良しとして、したたかに生きていたのである。

近代の知性は、母も子も、どちらも狼に喰われずにする方法を考え、¹²誰もが安全に生存するために、森を切り開き、狼を駆逐する。そのような目から見た前近代は、人間が幸せに生きる努力をしない怠惰な時代、狼をうろつくにまかせ、我が子を喰わせて自分は助かろうとする野蛮な時代である。深い森に囲まれ、美しい湖をたたえるヴェルムランドは、決して、近代人の夢見るユートピアではない。

ヴェルムランドがユートピアでないのと同様に、主人公イエスタ・ベルリングも聖人君子ではなく、アイスランド・サガに登場するような、完全無欠の英雄でもない。彼は輝くばかりの美貌と若さにあふれているが、貧しく、飢えと寒さに耐えきれずに酒に浸っている。彼は敬虔な牧師だったが、酒に酔っての説教を繰り返して免職される。一度は情熱的な説教をして免職を免れるものの、結局、その日のうちに再び酒を飲み、酒代欲しさに12歳の少女の小麦に手をつける。そして、雪の中に倒れて死のうとしているところを、少佐夫人マルガ

¹¹ Ebenda. S.100 (S.96.)

¹² 『ニルス・ホルガションの不思議なスウェーデン旅行 Nils Horgerssons underbara resa genom Sverige, 1906-07』には、狼に追われる男と老女が、その難局を知恵で切り抜ける場面がある。無事逃げおおせた後、男は、「困難な状況においても、知恵を使いさえすれば、不正を犯す必要はない」と思う。

レータ・サムセリウスに救われる。少佐夫人は7つの鉄工場¹³を管理するヴェルムランドの「支配者」で、エケビューの館に、仕事をせず、芸術と貴婦人を愛して遊び暮らす12人の「騎士」を囲っている。イエスタはその仲間に加わり、詩と恋愛に生きることになる。しかし、彼が騎士になって6年目のクリスマスに、「悪魔」と呼ばれる工場主シントラムがエケビューを訪れる。シントラムがイエスタに、かつてイエスタの恋人エバ・ドーナが死んだのは、少佐夫人が敬虔なエバに、イエスタが牧師をやめさせられたということを示したからだ、と吹聴すると、イエスタは恩を忘れ、他の騎士たちと共に少佐夫人の密通を暴いて、サムセリウス少佐が少佐夫人を追放するにまかせる。イエスタはその後、アンナ・シェーンヘーク、マリアンネ・シンクレア、エリサベト・ドーナという三人の女性と恋愛をし、最終的にはエリサベトと結婚して、騎士をやめて働き始めるが、エケビューを去る時、少佐夫人と和解し、牧師としてその最期を看取る。

彼の性格は、矛盾に満ちている。彼は、エバ・ドーナの義姉エリサベトを愛する。彼女は独善的な夫に離縁された後に子どもを産むが、子どもは弱く、数日しか生きられない。イエスタは、彼女への愛を成就するためではなく、死にゆく子どもに洗礼を受けさせるためにエリサベトと結婚する。同じイエスタは、しかし、戯れに、箒を売って歩く美しい「気違い」娘との結婚を思い立ち、エリサベトに諫められて一方的にそれを思いとどまり、犬をけしかけて彼女を追い払う。後にイエスタの結婚を知った娘は森の中で自殺するのだが、イエスタはそれを知ってなお、彼女を追い払ったのは彼女自身のためであり、自分は彼女と結婚の約束などしなかったと言い放つ。

イエスタは、「人間の中で最も強く、最も弱い者」¹⁴なのである。彼はエリサベトのためなら火の中にも水の中にも飛び込み、いかなる不名誉も甘んじてうける無私の「騎士」であり、同時に、少佐夫人を追い出したことにも、箒売りの娘を自殺に追い込んだことにも良心の呵責を感じない、身勝手に残酷な男である。¹⁵そしてそれは、彼がある時は善人である時は悪人だということ、あるい

¹³ この鉄工場は、近代的なものではなく、ハンマーとふいごを使って鉄を打つ、鍛冶場の規模の大きなものである。

¹⁴ Lagerlöf, Selma: Gösta Berlings saga. S.63. (Gösta Berling. Roman. S.62.)

¹⁵ vgl. Ebenda. S.214. (S.204-205.) 語り手は、作中でイエスタの残酷さを非難する。ただしこれは、ラーゲルレーヴが「気違いの箒売りの娘」を差別しなかったという意味ではない。時代の制約もあるとはいえ、ラーゲルレーヴの身分差別、障害者差別は、色濃いのがある。自伝『モールバック』には、父の友人が身分の低い女性をパーティーに招待して恥をかかせ、笑いものにしたという話が面白おかしく紹介され、温泉旅行に行つて自分の足が治る場面では、「無力で惨めな障害者ではなく、一人前の人間になった」という表現が使われる。エリサベトが諫めるのも、イエスタの差別主義で

は、ある時は強くある時は弱いということではない。レーヴェン湖が、美しさの中に常に悲しみと危険を湛えるように、イエスタの中にも善と悪が混在する。レーヴェン湖が、何人の人間を飲みこもうと、変わることなく美しいのと同じように、彼の強さはその弱さと表裏一体であって、彼がある種の弱さを持っているということはその強さを否定しないのである。彼がエリサベト・ドーナとその子どものために大きな犠牲を払ったということは、彼が箒売りの娘にしたことを帳消しにはしない。同時に、彼が娘に何をしたとしても、エリサベトに対する無私の愛は、やはり彼の真実である。彼の善性は、彼の残酷さを贖うことも美化することもなく、彼の身勝手はその聖なる思いを否定することもない。

善であると同時に悪であり、強いと同時に弱いイエスタ・ベルリングの物語は、しかし、全体としては「ハッピーエンド」に向かって収束して行く。イエスタはエリサベトと結婚して騎士をやめ、大工として働き始める。イエスタを愛しつつも結ばれることのなかった女性たちも、それぞれが幸福に生きる方法を見つけ、少佐夫人はイエスタと和解する。困難な生の物語は、悲惨な結末を迎えるのではなく、救済と解放を以って幕を閉じるのである。1909年、スウェーデン・アカデミーは、「高貴な理想」¹⁶を理由として、彼女にノーベル賞を与えるのだが、見方によってはご都合主義とも思える「ハッピーエンド」が、それでも「理想」であり続けることができるのは、彼女が人間の弱さを書かずしてその善性を主張することなく、安易に生きる人々に「ハッピーエンド」を安売りすることもないからである。

イエスタは、善意と強さに満ちた、この世ならぬ「英雄」ではない。飢えと寒さにひしがれ、結ばれ得ぬ人を愛しながら生きている、弱く、卑怯な人間である。イエスタにとって、生きていくことは、非常に困難なことである。彼は二度、自殺をはかるが、一度は少佐夫人の、もう一度はエリサベトの善意に触れて思いとどまる。その少佐夫人やエリサベトも、清純無垢な聖女でもなければ、志操堅固な貴婦人でもない。少佐夫人の鉄工場は、彼女が夫のサムセリウス少佐を欺き、工場主と密通して手にしたものである。しかし、イエスタに生きよと命じる時、彼女はしたたかで強欲な「サムセリウス少佐夫人」であることをやめて、純真で罪を知らなかった娘時代の自分、サムセリウス少佐と愛のない結婚をした日に死んでしまったはずの「マルガレータ・セルシング」に戻

はなく、貧しい者への慈悲を欠いていることに対してである。

¹⁶ vgl. Lindorm, Erik: Selma Lagerlöf. En Filmbok. Stockholm (Alb. Bonniers Boktryckeri) 1933. S.69. 「スウェーデン・アカデミーは、1909年11月11日、その作品に刻まれた高貴な理想、ファンタジーの豊かさ、魂の充溢した表現方法をたたえて、本年のノーベル文学賞をセルマ・ラーゲルレーヴに授与することを決定した。」

る。「マルガレータ・セルシング」は、いわば少佐夫人の良心なのだが、彼女はその後再び強権を振るう「サムセリウス少佐夫人」に戻り、「マルガレータ・セルシング」は最終章まで姿を現さない。「マルガレータ・セルシング」が蘇り、イエスタを救うのは、奇跡的な一瞬にすぎないのである。この作品においては、さまざまな人間が一度は自分の善意に基づいて行動するが、その時にその人が示す善意は、その人の過去の過ちを償うものではなく、未来永劫にわたってその人が善人であることを保証するものでもない。

しかし、普段の少佐夫人がどれだけしたたかで居丈高であろうと、ある瞬間に「マルガレータ・セルシング」が蘇り、その瞬間に支えられて、イエスタ・ベルリングが困難な生を生きぬいたということも、事実である。その瞬間は、これまでの、そしてこれからの少佐夫人がいかに高圧的で傲慢であろうと、イエスタがいかに弱く、利己的であろうと、否定されることはない。決して善人とは言えないこの作品の登場人物たちは、生涯のうちのある瞬間においてのみ、良心に基づいて英雄的な決断をし、その瞬間が、断じて立派な人間ではない別の人物の生涯を支える。この作品は、そのような瞬間の積み重ねの物語であり、「ハッピーエンド」はその帰結なのである。

そうであれば、『イエスタ・ベルリングのサガ』で展開されるのは、英雄の英雄物語ではなく、弱き者、英雄ならざる者たちの、悲しみと嘆きの物語である。先に引用した、レーヴェン湖に関する記述の中で、語り手が、ここへ来てはいけない、と言うのは、ボルイの館が、エバ・ドーナやエリサベト・ドーナの悲恋の場所だからである。語り手は、再三にわたって館や岬に来るなど警告した後、ここに住む者はみな不幸になるので、この館は燃やしてしまった方がよい、と主張する。しかし、そう主張しつつもなお、語り手は、この館に惹かれている。

けれども、炎が屋根をなめるのが見え、厚い煙が火で赤く光り、火花を散らして古い伯爵屋敷から立ちのぼる時、わたしはきつととても恐ろしくなることでしょう。木のはじける音、熱風の音の中に、わたしは家を失った記憶の嘆きを聞き、青い炎の先に、眠りを覚まされた亡霊が漂うのが見えるような気がすることでしょう。わたしは、悲しみがどれほどものごとを美しくし、不幸と嘆きがどれほどものごとを麗しくするかを考えるでしょう。まるで、古い神々の神殿が、死滅という判決を下された時のように。¹⁷

¹⁷ Lagerlöf, Selma: Gösta Berlings saga. S.177. (Gösta Berling. Roman. S.170-171.)

悲しみ、不幸、嘆きは、「夢の湖」の美しさ、麗しさの根拠なのである。ヴェルムランドの人々は、苦しみに満ちた長い生涯のただ一瞬においてのみ、彼らの輝きに満ちた良心を発露させ、その弱さを克服することも贖うこともないままに、英雄になる。数え切れないほどの人々の、数え切れないその一瞬の果てに、この作品の「ハッピーエンド」は、夢のような美しさで成就するのである。

(2) 雑多な登場人物たちと「サガ」

『イエスタ・ベルリングのサガ』には非常に多くの人物が登場する。作品の本編は36章から成るが、一章ごとにそれぞれの主人公が設定され、その人物について語るためにその章全てが費やされる。そのようにして語られる主要登場人物は十数人にのぼり、その中には、主人公イエスタ・ベルリングと直接関わりのない者もいる。たとえば、ブロービューの牧師は、第22章「ブロービューの牧師」、および第29章「早魃」の主人公である。この二つの章において、語り手は、彼がひどくけちで守銭奴であること、遅い結婚をして娘をもうけたものの、妻を過労死させ、娘を飢えさせた¹⁸こと、その彼を40年前の恋人がたずねてきたこと、ヴェルムランドを早魃が襲った時、彼が雨乞いの祈りをささげて雨を降らせ、力を使い果たして死んだことを語る。牧師がイエスタと直接かわりを持つのは、早魃の時、やはり落ちぶれた牧師であるイエスタと、ヴェルムランドで牧師をして生きることの難しさを語りあう時だけである。早魃の解消はヴェルムランドの行く末に関わることだとしても、40年前の恋人の話はイエスタのあずかり知らぬことであり、ましてやヴェルムランドの歴史を左右するようなことではない。それにもかかわらず、語り手は、恋人と彼がいかに愛しあっていたか、恋人がブロービューに来た日、彼らがどのように再会し、彼がいかにしてかつての高潔な自分に戻ったか、そして、彼らがどのように別れたかを、イエスタの恋物語に優るとも劣らない綿密さで語る。同じようにして、語り手は、不幸な結婚をした若い女、老いてはじめて人を愛した老嬢、天然痘で美貌を失った女、無神論の研究に生涯の全てをかける哲学者、魔女、ナポレオン戦争の兵士、放蕩者のヴァイオリニストのことを語る。

デンマークの自然主義文学者ブランデスは、この作品に高い評価を与えたも

¹⁸ この娘アンナ・リーサは、冒頭部分でイエスタに小麦を盗まれる娘である。イエスタは、少佐夫人がこの娘を引きとって養育することを条件に騎士になる。彼女は少佐夫人の忠実な女中として、作品の要所要所に登場するが、ブロービューの牧師との関係が物語の筋に直接影響することはない。

の、登場人物の多さを批判し、人物を少なくして一人一人の心情を丁寧に描写すべきだと指摘した上で、その評論を次のように締めくくる。

人間の心情を学び、書こうとする者には、壮大な風景や、多すぎる人物は必要ない。一人の男、一人の女、一人の子どもは、すでに一つの全き小宇宙であり、一つの全きヴェルムランド、いや、多くのヴェルムランドなのである。ラーゲルレーヴ婦人は今、我々に、彼女が聞いたもの、夢見たものを語ってくれた。将来においては、彼女は我々に、彼女が見たもの、感じたもの、完全に理解したものをぜひとも描いて見せるべきである。¹⁹

近代人の目には、多かれ少なかれ、この批判は当を得ているように見える。なぜなら、近代は、個人が社会から切り離され、属すべき場所を失って孤立した時代だからである。自然主義文学をはじめとする近代文学の作家たちが問題にしたのは、他者とのつながりや生まれ育った場所とのつながりではなく、個人が内面に抱えた、他人には決して分からない、時には自分にすら分からない闇である。彼らは、主人公の行動と心理をできる限り綿密に描き出すことで、この闇を正面から見つめ、理解しようとし、一篇の作品全てを費やして、孤独な個人と、人に孤独を強いる強大な闇を描き切ろうとした。

ここにおいて、ブランドスは、ラーゲルレーヴに近代的であれと要求している。しかし、ラーゲルレーヴが目指しているのは、まさしくその逆のこと、前近代的たることなのである。それは、この作品が「サガ」というタイトルを与えられていることから分かる。

スウェーデン語の *saga* は、アイスランド・サガ²⁰のみならず、広く北欧の歴

¹⁹ Brandes, Georg: Selma Lagerlöf. Gösta Berlings saga. S.718.

²⁰ 狭義の文学概念として日本語でカタカナ書きした「サガ」は、「アイスランド・サガ den isländiska saga」、すなわち、「ノルウェー系ヴァイキングが870年から930年ごろにアイスランドに移住した前後の顛末を描いたもので、12世紀から14世紀にかけて成立した散文の英雄物語」を指す。なお、この論文ではタイトルの *saga* を「サガ」と訳したが、古アイスランド語 *segja* 「言う」が語源であることから、「物語」という訳がより適切であるとも考えられる。実際に、村井誠人編『北欧史』（山川出版社、1998）では、『イエスタ・ベルリング物語』、山室静『北欧文学の世界』や、『ノーベル賞文学全集』（香川鉄蔵他訳、主婦の友社、1971）の著作目録でも、『イエスタ・ベルリング物語』となっている。野上彌生子訳は『ゲスタ・ベルリング』、丸山武夫訳は『ゲスタ・ベルリングの伝説』である。ただ、ラーゲルレーヴはこの作品を書くに当たって、カーライル『英雄と英雄崇拜』に大きな影響を受けており（ラーシェン『一神秘と幻想の作家—セルマ・ラーゲルレーヴ』、26ページ）、スウェーデン人文学者ブランドス『アイスランド・サガ de isländska sagornaを連想させる』と書いている（Brandell, Gunnar: En liten revolution. Om verkligheten i Gösta Berlingsa saga. In: Revolt i dikt. Stockholm (Bonniers Grafiska Industrier AB) 1977. S.34.）ことから、ここでは、中世の英雄物語を匂わせる語

史物語、系譜物語、民話、童話、空想物語などを指す。しかしそれは、物語一般²¹ではない。「サガ」は、キリスト教の「伝説」²²よりも古く、北欧神話の時代に由来し、個人の「こと」²³にとどまらず、複数の人間の運命が何世代にもわたって交錯するさまを伝える。サガは、一人の人間の頭の中で創作されたものではなく、基本的には口承文芸であり、世代から世代へと伝えられていく過程で少しずつその形を定め、完成された揺るぎないものとして、語り手の前に姿を現すのである。

ラーゲルレーヴも、『イエスタ・ベルリングのサガ』をそのようなものとして説明する。この作品の成立史『あるサガの物語』は、次のように始まる。

昔、あるところに、語られ、世に出ることを望んでいるサガがありました。それは当たり前のことでした。なぜならそれは、自分がすでに完成したも同様だということを知っていたからです。沢山の人が、注目すべき行動をとることで一緒になってそれを創り、別の人々は、繰り返し繰り返しその行動について話すことでそれに寄与しました。ただ、それが各地へ心地よくすべり出して行くには、最低限のまとまりが足りませんでした。それは依然として、個々の事柄の群れであり、形をなさない冒険譚の雲にすぎませんでした。それはまるで、迷った蜂の群れのように、あちらからこちらへと行き交い、自分たちを巢に集めることのできる者がどこにいるのかを知らませんでした。²⁴

『イエスタ・ベルリングのサガ』は、近代の小説のように作者が頭の中で創作したものではなく、人々が口づてに伝えてきた物語を、やはり口づてに、語り手が語ったものという体裁を取る。形を定めることができずに漂っていたこのサガは、やがてラーゲルレーヴとおぼしき少女に出会い、少女は語り手になろうとしてさまざまな方法を試みる。彼女はこのサガを、韻文、戯曲、リアリズム小説として書こうとして失敗した後、何が起こるか分からないままに、恍惚としてペンを走るにまかせる。すると、「知らなかったことと知らなかった考え、

として、「サガ」という訳語を採用した。

²¹ berättelse。「話す」「物語る」を意味する *berätta* に由来。なお、*saga* と語源を同じくする動詞 *säga* は、現代スウェーデン語では、「言う」「意味する」という意味である。同じ語源の *sägen* 「言い伝え」という名詞もある。

²² legend.ラーゲルレーヴ『キリスト伝説集』の原題は、*Kristuslegender* である。

²³ historia。「歴史」「一口話」「もの、こと」をさす。第12章は、アンナ・シェーンヘークが、エリサベト・ドーナにエバ・ドーナのことを語るという内容で、「エバ・ドーナのこと *Ebba Dohnas historia*」という題が付けられている。

²⁴ Lagerlöf, Selma: En saga om en saga. In: En saga om en saga och andra sagor. Stockholm (Bonniers Grafiska Industrier AB) 1984. S.5.

より正確に言えば、自分の頭の中にあるということに彼女が一度も気づかなかったようなことが、紙の上に押し寄せてきました。ページは、彼女が夢にも思わなかったような激しさで埋まってゆきました。」²⁵この作品は、一作家の理解と力量を超えて、長きにわたるヴェルムランドの歴史の中で、いわば運命的にその形を取るに至ったのであり、そうであるがゆえに、一作家が自分の頭で考えた、詩や演劇、リアリズム小説といった形式を受け付けなかったのである。

このサガを選んだのは、「長編小説で、かつ、それぞれの章が〔短編小説のように〕独立している」²⁶という形式だった。各章の独立性を、ブランデスは「多すぎる登場人物」という形で批判し、ラーゲルレーヴも、それが「風変わりに見えるでしょう」²⁷ことは認めている。「けれども、それは、この本に大きな豊かさや力を与えるでしょう。」²⁸各章が独立を保ちつつ、作品全体とつながりを持つというあり方は、そのまま、この作品における個人と社会の関係を示している。各章が短編小説とも呼び得るほどに独立しながら、それでもこの作品が「短編集」ではなく「長編小説」であり得るのは、各章で語られる物語群の背後に、ヴェルムランドという、全てを包み込む大らかな世界があり、その世界が、独立しているかに見えるさまざまな物語を根元のところでつなぎ合わせているからである。前近代のヴェルムランドで、社会から孤立した個人が、個人としてあるべき姿を模索することはない。そこは、個人と社会が分かちがたく結びついている世界、まだ個人という発想すらない世界である。その世界において営まれる限り、イエスタの生が、彼一人において完結することはない。

『イエスタ・ベルリングのサガ』は、イエスタ・ベルリングだけの物語ではなく、イエスタと共にヴェルムランドに生きる全てのものの物語なのである。彼らの物語は、断片的なエピソードとして並んでいるのではなく、緩やかな、

²⁵ Ebenda. S. 13.

²⁶ Ebenda. S. 11.

²⁷ Ebenda. S. 11.

²⁸ Ebenda. S. 11. なお、以上の三つの引用は、以下のような関連にある。「けれども作家は、この不幸な生まれ方をした短編〔最初、即興詩として書き、短編として書きなおした第4章「詩人イエスタ・ベルリング」〕を、どこに載せたらいいだろうと思いました。サガの中に入れてみたらどうでしょう？けれどもそれは、それ自体として完結した冒険物語でした。それは、その章よりは関連の強いその他の章の間にあると、風変わりに見えることでしょうか。それを実行するのは難しいことですが、きっと、上手く適合することができるでしょう。もしも、サガの全ての章を、と彼女は思いました。そのように、ほぼ完結した冒険物語として書いたらどうでしょう？それはおそらく、関連性の間の隙間となるでしょう。けれどもそれは、この本に非常な豊かさや力を与えることでしょうか。

今や、二つの重要なことが決まりました。この本は、長編小説になるであろうこと、そして、それぞれの章が自己充足していることが決まりました。」

しかし外すことのできないつながりを持って、ヴェルムランドを織りなしている。一人の人物について一章ないし二章分しかページが割かれぬのは、その章において彼らの生涯全てに匹敵するようなことが起こるからである。この作品の一つ一つの章に書かれているのは、彼らのいつもと変わらぬ日常ではなく、生涯最高の瞬間である。それはたとえば、40年前の愛が蘇る瞬間であり、落ちぶれた牧師が奇跡を起こす瞬間である。あるいは、若い女性が至高の愛を諦める瞬間、老嬢がはじめて人を愛する瞬間、ヴェルムランド—とうたわれた美貌が失われる瞬間、生涯をかけた著作が完成する瞬間、魔女の呪いが成就する瞬間である。彼らの生涯は、その瞬間を以って全てを語ることができる。ヴェルムランドに住むさまざまなものたちは、その瞬間と、彼らの生涯の全てによってヴェルムランドを彩り、その豊かさを保証するのである。

もちろん彼らの物語は、ヴェルムランドの歴史にとってさして重要なものではない。彼らは所詮、死すべき人間であり、彼らの生涯最高の瞬間を以ってしても、ヴェルムランドの歴史は微動だにしない。ヴェルムランドの歴史を動かすのは神であり、運命であって、そこに生きる者は、動いてゆく歴史に翻弄されるのみである。イエスタを含む十数人は、翻弄されつつ、1820年代のヴェルムランドに、ただ、いるだけである。しかし、彼らは近代の個人のように、交換可能な歯車として、取るに足らない生を許されているのではない。一人一人の人間の生も死も、ヴェルムランドにとっては何の意味もなく、そして、その意味のない一人一人が、ただ、いるということが、ヴェルムランドがヴェルムランドであるために必要なのである。

ヴェルムランドの人々は、一人一人の人間の存在価値や善悪を判断しない。彼らは牧師としてのイエスタだけでなく、乞食としてのイエスタも、騎士としてのイエスタも受け入れる。しかしそれは、寛容にイエスタの罪を許すということではなく、イエスタを憐れんでその罪を不問にするということでもない。「早魃」の章に次のような一節がある。

太陽はイエスタ・ベルリングに似ています。太陽が誰にも喜びを与えるのは、それが引き起こす悪いことを、誰も口にしないからです。²⁹

イエスタがヴェルムランドにいるということは、太陽があるのと同じように当然のことなのである。イエスタは、歓迎もされなければ、嫌がられもせず、かといって無視されるのでもなく、ある時は牧師として、別の時は乞食として、

²⁹ Lagerlöf, Selma: Gösta Berlings saga. S. 322. (Gösta Berling. Roman. S. 310.)

また別の時は騎士として、ただ、そこにいる。ブロービューの牧師も、女たちも、魔女たちも、森も湖も、熊や狼も、誰によっても、何の価値判断もこうむることのないまま、ヴェルムランドに確固とした居場所を持つ。イエスタが「一つの全きヴェルムランド」であるとすれば、それは、イエスタが個人として、一人で社会の孤独や闇を映し出しているからではなく、彼がヴェルムランドに居場所を持つ一人だからであり、ヴェルムランドが、イエスタを含むあらゆる人、あらゆるものの物語なくしては完結しないからである。

『イエスタ・ベルリングのサガ』の場面の多くは、夜や夕ぐれ、あるいは光の射さない森の中で展開される。ラーゲルレーヴの描くヴェルムランドは、啓蒙の光に照らされる以前、前近代の夜と闇の世界である。そこにおいては、全てが、社会にとっての要不要で区別されることも、その善悪を判断されることもなく、ただ、そこにあり、美しきものと醜きもの、強きものと弱きもの、善きものと悪きものが分かちがたく交ざり合う。夜のヴェルムランドは、近代においてはもはや存在し得ない混沌とした世界であり、あらゆるものが、存在意義など持たぬままに確固とした居場所を持つ、豊かな世界なのである。

2. 「子どもの視点」と「大人の語り手」

『イエスタ・ベルリングのサガ』は、19世紀も末になって出版されたにもかかわらず、特定の作者を持たない伝承であるかのように振る舞い、語り手がいて聞き手がいるという、前近代的な形式を取る。内容もやはり前近代的で、熊や野原が口をきき、精霊や魔女といった「非科学的」なものが数多く登場する。たとえば「ドヴレの魔女」は、毛皮のスカートに銀の鉾のついたベルトを着けた老女で、狼の穴に住み、乞食をしながらヴェルムランドをめぐる、彼女に不親切にした者に呪いをもたらす。

彼女は強いのです。彼女は魔術に長けたフィン人の娘で、誰にも頭を下げません。彼女の幅の広い足はほんの少しの足跡も街道の砂利の上に残しはしません。彼女は雹を降らせ、稲妻をあやつることができます。けもの群れを道に迷わせ、羊の群れのところに狼をおびき寄せすることもできます。彼女は善いことは少ししかできませんが、悪いことは沢山できます。彼女と上手くやって行くことができれば、それが一番良いのです。³⁰

³⁰ Ebenda. S.251. (S.241.)

伯爵夫人メッタ・ドーナは、彼女に食べ物を乞われ、彼女にやるくらいならかささぎにやった方がましだと答えたために、呪いをかけられ、かささぎの大群に襲われてヴェルムランドを追われる。語り手はこのような「非科学的」な「迷信」をそのまま信じているかのようであり、それどころか、自ら進んでその「迷信」に荷担する。

何百年もの間、彼女は生きていました。長老たちさえ、彼女が国をめぐる時を覚えていません。その父親たちも、若かりし日に年老いた彼女を見たのでした。彼女は死ぬこともありませんでした。これを書いているわたし自身も、彼女を見たことがありました。³¹

ブランドスは、この作品は、彼女が子ども時代に聞いた物語を、そのまま「子どもの視点」から書いたものだと言主張する。³²確かに、彼女が「ドヴレの魔女」に対して抱いている畏敬の念は、近代の「大人」らしからぬ、蒙昧で子どもじみたものである。そして、その「非科学的」思考や「迷信」の根が、一日の大半を祖母や乳母と過ごした幼い日々にあるということも、おそらく事実である。

幼いラーゲルレーヴに話を聞かせた祖母や乳母は、近代初期を迎えてなお、前近代的な感覚の持ち主だった。乳母バック・カイサは、水平線の向こうの水は滝のように落ちていと信じていた。祖母リーサ・マーヤは結婚して間もない頃、狼が二人の子どもをくわえて走り去る夢を見、その数か月後に、実際に子どもを亡くした。子どもは彼女が家に泊めたナポレオン戦争の敗残兵に赤痢を染されて死んだのだが、彼女は、狼の夢は「神様の警鐘」だったと信じ、その警鐘に気づくことができずに、敗残兵を追い返すことのできなかった我が身を責めた。³³彼女たちは、理解不能なもの、危険なもの、自分たちの生を脅かすものを、近代人がするように、原因を解明し、理解し、解決しようとはせず、ただ、何か恐ろしいもの、自分の力の及ばぬものとして、疑うことなく引きうけていた。そして、その生き方は、近代人が思うほど、閉鎖的でみじめなものではなかった。少なくとも物語の中では、フィン人の乞食女が、地位も名誉もあるはずの伯爵夫人を圧倒する。「おまえこそ、かささぎに食われるがいい」³⁴というドヴレの魔女の呪いの言葉に響くのは、乞食をしても誰にも頭を下げるこ

³¹ Ebenda. S.251. (S.241)

³² Brandes, Georg: Selma Lagerlöf. Gösta Berlings saga. S.715.

³³ ラーゲルレーヴ、セルマ（今野智雄訳）：『モールバック』（未出版。訳者のご好意により、全訳を譲っていただいた）

³⁴ Lagerlöf, Seima: Gösta Berlings saga. S.253. (Gösta Berling. Roman. S.243.)

とのない、彼女の誇りである。近代人から見て「非科学的」であろうと、「迷信」と呼ばれようと、祖母や乳母が語った理解不能な物語は、幼いラーゲルレーヴの孤独な日々を彩っていた。そのような物語を語るということと、彼女の子どもの時代、あるいは彼女の「子どもらしさ」を、切り離すことはできず、彼女はペンを走るにまかせた時、「あらゆる子どもじみたところ、あらゆる夢と共に自分自身を差し出すことを恐れ」³⁵なかった。

しかし、子どもの頃はどうか、ラーゲルレーヴは祖母や乳母とは違う、近代的知性の持ち主でもあった。近代人として彼女は、「迷信」の時代が終わりつつあることを知っていた。だからこそ、『イエスタ・ベルリングのサガ』の語り手は、次のように「迷信」を擁護する。

この物語も、きっと、ぼかしたのに見えることでしょう。けれどもそれは、真実であったにちがいないのです。古い言い伝えがそのとおりだということを確認し、立証する人は、何百人もいることでしょう。³⁶

彼女の祖母や乳母には、このようなことを言う必要はなかった。『イエスタ・ベルリングのサガ』の語り手は、近代の読者が、もはや、ドヴレの魔女を「子どものように」信じはしないことを知っているのである。

グンナル・ブランドルは、ブランドスを批判して、この作品には、「子ども」のほかにも大人の「語り手」がいると指摘し、この二人は、どちらも作者ラーゲルレーヴの否定することのできない側面であると主張する。ラーゲルレーヴが、純真さ、信じやすさといったある種の「子どもらしさ」を備えているのは事実だが、同時に彼女は、教員養成所で批判的な考え方を学んでもいる。ラーゲルレーヴはこの作品を、歴史的事実としてではなく、事実を理想化したフィクションとして書いたのである。³⁷

つまり、この作品の記述には、多分に大人になったラーゲルレーヴの作為がある。「完成したに等しい」物語を、ペンを走るにまかせて書いたとはいえ、そこには「長編小説」という、きわめて近代的な形式がある。そしてこの作品は、ヴェルムランドの伝承を下敷きにしてはいるにせよ、実際には大部分が彼女の創作なのである。ラーゲルレーヴの自伝『モールバック』には、『イエスタ・ベルリングのサガ』の人物を彷彿とさせる人々が登場するが、彼らは登場人物た

³⁵ Lagerlöf, Selma: En saga om en saga. S.13.

³⁶ Lagerlöf, Selma: Gösta Berlings saga. S.254. (Gösta Berling. Roman. S.244.)

³⁷ vgl. Brandell, Gunnar: En liten revolution. Om verkligheten i Gösta Berlings saga. In: Revolt i dikt. Stockholm (Bonniers Grafiska Industrier AB) 1977. S.35-36.

ちと全く同じではない。また、作品の舞台となる1820年代という時期も、作者が意図して選んだものである。³⁸「大人の語り手」は、そのようなさまざまな作為にもかかわらず、4歳の少女が祖母の話をして信じるように、「迷信」も含めて、全てを信じているように見えるのである。それは、大人になったラーゲルレーヴが、子ども時代と同じように「非科学的」であったからではなく、近代科学に背を向けて「古き良き」昔にしがみついていたからでもない。

『イエスタ・ベルリングのサガ』を書いていた頃、ラーゲルレーヴは、ランスクローナで女学校の教師をしていた。もちろんそれは、家が破産し、結婚も望めない女性にとって、我が身を養う唯一の方法だった。しかし、いかに抜き差しならない状況にせまられての選択だったとはいえ、教師になるということは、近代教育を担い、子どもたちに科学的な視点を示すということである。彼女は非常に熱心な教師であっただけでなく、後には、スウェーデン教育委員会の依頼を受けて、小学校の地理の副読本『ニルス・ホルガションの不思議なスウェーデン旅行』³⁹を書いてもいる。その中に登場する少女オーサのエピソードは、途中まで、リーサ・マーヤの話とよく似ている。彼女の家族は、「自分を介護したものは自分と同じ病気にかかって死ぬ」という「呪い」をかけられた女を家に泊め、看護する。女が病死した後、4人の姉と母親は女と同じ病気で死に、父親は傷心のあまり正気を失って家を出る。しかし、遺されたオーサは、リーサ・マーヤのように、それを運命として諦めはしない。彼女は、結核撲滅のための講演会に出席し、その病気が肺結核であったこと、結核は死に至る病だが呪いではないこと、きちんと掃除をして病原菌を駆除すればいつかは撲滅できることを知って父親に告げ、父親は正気を取り戻す。これは、近代的知性の勝利である。

前近代において、結核が人を不幸にし、一つの家族を崩壊させるのは、予防法や治療法が確立されていないからではない。感染をまぬがれたオーサの弟は、発破をかけられた岩の破片に当たって命を落とすが、この時代には、人が若くして死ぬ原因は、結核以外にもさまざまにあった。そうした中で、不治の病にかかって死ぬこと自体は、死にゆく者にとっても、遺された者にとっても、大いなる悲しみではあるにせよ、決して、取り返しつかない打撃ではなかった。

³⁸ このことについては、次号掲載の第III章で詳しく論じる。

³⁹ ラーゲルレーヴ、セルマ：ニルスのふしぎな旅（香川鉄蔵、香川節訳）（偕成社）1982。原題は、『ニルス・ホルガションの不思議なスウェーデン旅行、Nils Horgerssons underbara resa genom Sverige, 1906-07』。いたずら好きの少年ニルスが魔法をかけられて小人に変えられ、空飛ぶガチョウに乗って、ガンの群れとともにスウェーデンを巡るというもの。スウェーデン教育委員会の依頼を受け、小学校低学年の地理の教科書として書かれた。

オーサの父親にとって決定的な打撃となったのは、正しいことが呪いを以ってしか報われず、悪意が善意を圧倒する、その理不尽さだった。前近代の無知は、結核の治療や予防を妨げるだけでなく、行き倒れの病人を看護するという人間らしい行動に対して、誇りを持つことをも妨げる。「ドヴレの魔女」の誇りは、魔女と呼ばれ、人を呪うことでしか表わし得ない、うつろな誇りである。あるいはラーゲルレーヴは、足が不自由だったために、ダンス・パーティーに行っても誰にも誘ってもらえず、結婚もできなかった。全てのものに居場所のある前近代的世界は、同時に、障害者が障害者であるというだけで結婚できず、結婚できないことがそのまま厄介者の烙印であるような閉鎖的な世界でもある。人間が、人間らしい誇りを持って生きていくためには、無知と迷信の克服がどうしても必要であるということ、ラーゲルレーヴは知っていた。

しかし、ラーゲルレーヴが知っていたのは、前近代の居心地の悪さだけではなかった。彼女の感性は良くも悪くも前近代に根ざし、その感性は、理性による判断を超えて、前近代的世界を愛していた。彼女は自然主義文学の全盛期にあって、「時代遅れ」の「ロマン主義者」でしかあれない自分を知っていた。⁴⁰ラーゲルレーヴがこの作品を、リアリズム小説として書けなかったのは、ひとつには、その形式が作品にふさわしくなかったからだが、もうひとつには、それが彼女の感性にあっていなかったからである。ラーゲルレーヴは、精霊や魔女の物語に彩られた少女時代を、多くの困難があったにもかかわらず、常に、人生で最良の時代として思い出す。彼女が60歳を過ぎて書き始めた自伝⁴¹は、大部分が幼少期についての記述に費やされ、日記まで含めても、15歳の時点で終わっている。そこには作家としての成功や取材のための外国旅行のことは一行も書かれていない。後に、ノーベル賞の受賞公演で、ラーゲルレーヴは、幼い頃に父が炉辺で読んでくれた物語の作者たちは、「物語や英雄の行為、故郷と人間の生活を、あらゆる偉大さとあらゆる弱さにおいて愛することを教えてくれた」⁴²と語ったが、彼女は、自分を育てた場所、人々、暮らし方を、それらの偉大さゆえにではなく、偉大さも弱さも含めた全てにおいて愛したのである。近代人の目から見ていかに差別的で閉鎖的な時代であろうと、足の悪い少女にとっていかに過ごしにくい時代であろうと、ラーゲルレーヴはその時代に生を享け、家族や使用人に大切にされて幼少期を過ごした。生を享け、幼少期を過

⁴⁰ vgl. Lagerlöf, Selma: En saga om en saga. S.11.

⁴¹ 自伝『モールバック Märbacka』は三部作となっており、第一部『モールバック』は1922年に、第二部『子供の思い出 Ett barns memoarer』は1930年に、第三部『日記 Dagbok』は1932年に出版されている。

⁴² Tal vid Nobelfesten 10 december 1909. In: Troll och människor. Stockholm (Alb. Bonniers Boktryckeri) 1915. S.240.

ごしたという、まさにその理由によって、前近代は、彼女にとって幸福な時代となったのである。

しかし、彼女の幼少期は、前近代的世界がかろうじてその姿を保てる、最後の時期だった。ラーゲルレーヴが愛し、感性を深く根付かせた前近代、彼女を守り、育てた前近代は、家の破産、父の死、屋敷の競売という形で完全に崩壊する。だからこそラーゲルレーヴは、箒売りの娘を死に至らしめるイエスタの身勝手も、妻を死なせ、娘を飢えさせるブロービューの牧師も、人を呪うドヴレの魔女も、全てを肯定する。たとえ、近代人の目から見れば差別と迷信以外の何ものでもないとしても、それらはヴェルムランドの豊かさを支えてもいた。前近代の闇の中では、善と悪、美しさと危険、強さと弱さといった正反対のものが分かちがたく混ざり合い、どちらか一方を損なうことなく、もう一方を解消することは不可能である。人々が啓蒙されて女性差別が解消され、結核が撲滅された時には、闇の森にも光が当たり、ヴェルムランドの豊かさを彩る精霊たちや魔女たちは、居場所を失って消えて行く。イエスタの愛も、ドヴレの魔女の力強い誇りも、夕暮れに響く騎士たちの歌も例外ではない。ラーゲルレーヴは、人間を苦しめもしたが豊かにもした、消えゆく闇の世界のものたちを、近代的理性による批判を越えて愛し、悲しみ、悼んだのである。

騎士の一人エーベルハルド・ベルイグレンは哲学者で、第31章「アモール・ヴィンチト・オムニア（愛は全てを克服する）」において、無神論の論文を書き上げる。それは彼の生涯をかけた大作で、神も魂も存在せず、愛とは肉欲に他ならないということ完璧に立証したものだ。その著作を以って、彼の名は不滅のものとなるはずだった。しかし、娘のように愛していたエリサベト・ドーナに、そうだとすれば「世界は灰色で、醜く、全ては意味のないものになってしまう」⁴³「そんなことを信じたら、わたしは生きていけない」⁴⁴と嘆かれ、その著作をスヴァルトシェーの教会に鍵をかけてしまいこみ、19世紀の終わりまで封印せよと遺言する。その後結局、エーベルハルドは論文を箱から出して廃棄するのだが⁴⁵、『イエスタ・ベルリングのサガ』においては、近代的知性が、正当性の欠如ゆえにではなく、「非科学的」なものへの愛ゆえに、「迷信」に場所を譲るのである。エーベルハルドがエリサベトへの愛ゆえに、生涯をかけて追究した真実を封印したように、ラーゲルレーヴも、自分の感性が根ざす場所、彼女を苦しめもしたが慈しみもした前近代的世界の崩壊を前にして、

⁴³ Lagerlöf, Selma: Gösta Berlings saga. S.343. (Gösta Berling. Roman. S.330.)

⁴⁴ Ebanda. S.344. (S. 331.)

⁴⁵ Lagerlöf, Selma: Den förste i förste år nittonhundra. In: Osynliga länker. Stockholm (Bonniers Grafiska Industrier Ab) 1984.

自らの近代的知性が発する声を封じ込める。この作品は、滅びゆく世界への哀惜から生まれた、ヴェルムランドの吊いの物語なのである。

次号掲載の第三章では、この作品においてヴェルムランドはどのように滅び、それを語り手はどう吊うのか、第四章では、過ぎ去った時代の物語を書き、滅びたものたちを吊うことが、現在を生きることとどう関わるのかを考えてみたい。

Erzählen in der Dämmerung

Selma Lagerlöfs „Gösta Berlings saga“ als Roman der Prä-Moderne

Teiko NAKAMARU

Ich studiere über Selma Lagerlöfs „Gösta Berlings saga“ in meiner Magisterarbeit. Ich interessiere mich dafür, dass Lagerlöf über die schöne Welt und über gute Menschen schreibt, während die modernen Autoren meistens die grausame Welt und böse Menschen darstellen. Auch Lagerlöf kennt die Grausamkeit und das Böse in der modernen Zeit, aber sie beschreibt trotzdem nicht. Als ich darüber nachgedacht habe, warum sie so schreibt, bin ich auf der Begriff „Dämmerung“ gestoßen.

„Dämmerung“ im Titel meiner Arbeit hat drei Bedeutungen.

Erstens bedeutet „Dämmerung“ »die unaufgeklärte Welt«. Im Roman beschreibt Lagerlöf ihre Heimat in den 1820er Jahren. Die Zeit ist die prä-moderne Zeit und die Welt behindert sich noch in der Dunkelheit, während die moderne Zeit aufgeklärt und in Licht getaucht ist. Die moderne Vernunft trennt die Dinge dualistisch, z.B. Gut und Böse, Schönheit und Grausamkeit. Aber im Roman vermischen sich Gegensätze miteinander. Lagerlöf fällt kein Wert urteilt, sondern liebt alles, die Welt und die Menschen.

Zweitens bedeutet „Dämmerung“ »die vergehende Welt« oder »die vergangene Welt«. Viele prä-moderne Personen sterben im Roman, und es entstehen moderne Dinge, z.B. das Buch über Atheismus. Es ist das Ende der prä-modernen Zeit, das Lagerlöf „ragnarök“, Götterdämmerung nennt. Die Erzählerin trägt Trauer um die Welt und versucht zugleich zu behaupten, dass die vergangene Welt andere Wert als die moderne Welt hat.

Drittens bedeutet „Dämmerung“ »die Welt im Traum«. Lagerlöf liebt die vergangenen Personen und möchte zu ihnen sprechen. Aber sie kann es nicht im Licht des Tages. Also muss sie zu ihnen im Traum, in der Dunkelheit sprechen. Es ist notwendig für sie, um ihre gegenwärtige Wirklichkeit, wo sie viele Schwierigkeiten hat, zu bestehen.

Ich teile meine Magisterarbeit in zwei Teile. Dieses Mal handelt es sich besonders

um „Dämmerung“ als die erste Bedeutung. Lagerlöf beschreibt Värmland in den 1820er Jahren als eine Art von idealem Ort und nennt Gösta Berling, die Hauptperson „Kavalier“, obwohl er „der Stärkste und der Schwächste unter den Menschen“ ist und die Welt, wo er wohnt, sowohl schön wie grausam ist. Der negative Begriff, z.B. Schwäche und Grausamkeit gibt Lagerlöfs edle Idealität Echtheit.